九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代朝鮮における出版文化の形成と日本 ： 出版社新文館（1908-1922）を中心に

田中，美佳

https://hdl.handle.net/2324/4495986

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式３）

氏　　名　：田中美佳

論 文 名　：近代朝鮮における出版文化の形成と日本
　　―出版社新文館（1908-1922）を中心に

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

新文館は、1908 年に知識人の崔南善によって設立された朝鮮で最初の本格的な出版社であり、朝鮮出版文化の基礎を築いた存在として位置づけられている。そのため、韓国を中心に膨大な研究蓄積があるが、いずれも諸外国の影響には関心を払っておらず、一国史的に分析されている。さらに刊行物の内容に分析が集中する一方、挿絵やレイアウトといった形式面、経営戦略など出版社としての側面に考察が及んでおらず、新文館の全体像は未だ不明瞭である。そこで本論文は、崔南善が日本留学後に新文館を立ち上げた点に着目し、日本からの影響という視点を取り入れ、さらに刊行物の形式面も含めて包括的に分析することで、近代朝鮮における出版文化の形成過程を実証的に解明することを目指した。

第１章では、新文館初の刊行雑誌であり、朝鮮最初の近代雑誌と称される 1908 年創刊の『少年』について日本の出版界との関係性という視点から考察し、同誌が博文館の『少年世界』などを読者投稿欄等の形式面で参考にしつつ、内容面では、啓蒙要素の強いものや一般大衆向けの日本書籍を多数翻訳することで構成されていたことを明らかにした。

続く第２章では、新文館が 1910 年の韓国併合によって『少年』が廃刊になった後に着手した『赤いチョゴリ』等の児童雑誌に関して分析した。新文館の児童雑誌に掲載された漫画や迷路遊びなどの児童向けの挿絵は、韓国の連載漫画や児童文化の起源と評価されるが、これらは巌谷小波が編集した雑誌等を参照・転載したものであった。一方、児童雑誌は朝鮮の昔話や人物等の紹介、ハングル表記といった所謂＜朝鮮的なもの＞の掲載も多くの比重を占めるが、日本書の翻訳の過程で漢字語を朝鮮の固有語に直すなど、1910 年の植民地化によって失われゆく朝鮮の伝統や文化、文字を保存しようとする崔南善の姿勢が顕著にみられることも示した。

第３章では、児童雑誌に次いで創刊され、1910 年代の朝鮮で人気を博した「総合教養」雑誌『青春』について検討した。同誌は、各国の文物等の紹介といった当時の言葉でいう「世界的知識」の掲載の多さが特徴である。先行研究はこれら「世界的知識」を扱った個々の論説について、崔南善ら朝鮮人が自ら執筆したものであることを前提に分析しており、実際は翻訳物であったという事実を看過してきた。この問題点をふまえ、当時の日本の刊行物と比較対照し、

『青春』の約 150 篇の翻訳作品の底本を特定した。そのうえで、『青春』の「世界的知識」の発信が複数の日本の雑誌や書籍の翻訳を通してなされていたこと、他方で底本の選定基準や翻訳方法には、読者に世界を身近に感じさせるための工夫が数多く施されていることを解明した。

第４章では、第３章まで分析してきた新文館の刊行物を、「女性」という視点から再考察した。当時の朝鮮における女性観や女子教育をとりまく状況といった時代背景や、少女向け雑誌が流行していた同時代の日本の文学界といった外的条件を考慮しながら分析し、女性という観点自体が欠如していた新文館が、次第に女性を読者に含めるようになる経緯をたどった。

第５章と第６章は新文館の単行本を扱う。まず第５章では、「十銭叢書」や翻訳小説、「六銭小説」といった所謂シリーズ書籍を取り上げ、これらは翻訳などの内容面では山縣悌三郎が経営する零細出版社の内外出版協会の書籍に多く依拠していたが、挿絵やデザインといった形式面では大手出版社の博文館の書籍が参照されており、書籍をシリーズ化して定期刊行するという従来の朝鮮にはなかった発想自体も同社を参照した可能性が高いことを示した。崔南善は山縣の啓蒙思想に共鳴しており、それゆえ新文館は内外出版協会の刊行物を多数翻訳したが、その「売り方」においては大手出版社であった博文館の手法を取り入れることで、新文館の出版社としての安定的な経営と発展を企図していたといえる。続く第６章では、1910 年代後半に刊行された朝鮮初の本格的な現代文教科書『時文読本』について分析し、同書が当時の日本を代表する中等国語教科書であった明治書院の『中等国語読本』を参照して作成され、そのほか複数の日本の教科書の作品が翻訳掲載されていることを明らかにした。その一方で、『青春』をはじめ自社の刊行物を再掲するなど独自の要素がみられることも示した。

最後に第７章では、崔南善が 1922 年に新文館を解散させ新しく設立した東明社の『東明』に焦点を当て、新文館終焉の経緯とその後の崔南善の出版活動について考察した。『東明』は幅広い層を読者に取り込むために娯楽要素を含んだ文芸欄を充実させていたが、その際に日本の刊行物を多数翻訳するなどしており、こうした日本書の活用を含め、崔南善が新文館から雑誌を刊行していた際のさまざまな取り組みが反映されていることを示した。

以上、本論文では、近代朝鮮における出版文化の基礎を築いた新文館が刊行物の内容面から形式面、企画や経営戦略にいたるまであらゆる面で日本の影響を受けていた一方で、底本の取捨選択や翻訳のプロセス等で独自の要素を加えることで、植民地下にあった朝鮮の状況に合わせて再構成していたことを解明した。新文館が生み出した近代朝鮮の出版文化は、当時の朝鮮の状況という内的条件と日本の出版界という外的条件が組み合わさった産物であったといえる。